



雜記

柳田文庫  
文庫11  
A1834  
3



越後中藩  
原郡白井  
新田氏印

文庫11  
A1834  
3

御田泉文庫

西洋雜記卷三

目錄

- 冠并トルバンドの説
- ヘルマニアの帝傳國の寶器の説
- 西洋諸國の名義
- 依蘭地の説
- 印度の人蛇を啖ふ説
- キルクツセンの説
- エツセドンの説
- 小人國の説

西洋雜記卷三

目一

犬馬諸獸年を経るといへども小なること

初生の時の如くならしむるの説

カンキユツト國傳統の説

アフリカ洲に異類の人物ある説

モロコシに暹羅の尊號の説

暹羅國の説

エ鄂國の説

アントロポハアジトの説

ヘルマニヤ國の鬼城鬼塔の説

ヘナシヤ國の都城の説

鐵門關の説

ゲロー子ンの説

ガツリユス河水の説

莫可沙國の説

多鼠島の説

那波里の石穴の説

ゲ井ム子エデンの説

不老不死の王といふ説

風鳥の説

カナアリヤ鳥の説

墨西哥國大鴉の説

墨墨西哥國大鴉の説  
(以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が散見する)



西洋雜記卷三

冠并「トルバンド」の説

冠ハ和蘭語「コロイン」といふ。歐羅巴の諸國其帝王公  
侯の爵は随く冠の制各異なり。皆金銀諸寶を以て  
是を美飾し。以て傳國の寶となり。新主世を嗣ての  
ち即位の礼を行ふ時ハ必其傳國の寶冠を戴て  
群臣の拜賀を受く。古きを名け「ケコロイン」といふ  
冠之といふ義なり。入ル馬泥亜の傳國の寶器そ  
の第一ハカーレルゴロート帝所製の寶冠なりといふ

百見西亞都兒格等諸國の人ハ皆頭ハ布を以て  
 旋廻して赤きを包きて中々たる號して「トルバンド」と  
 呼ぶ。赤きを百見西亞の人ハ「フルガツ」と呼ぶ。都兒格の帝  
 の戴くともはれ「トルバンド」ハ其形大なり。玉石赤きを  
 飾り。三束の鷲羽を其前ハ挿む。赤き亞細亞歐羅巴  
 亞弗利加の三大洲を表し。そのなりとす。馬  
 哈默の子孫。都兒格亞刺比亞等の地ハある。此ハ稱  
 て「エミルス」とす。其人ハ赤色の「トルバンド」を戴くとす。  
 入ル馬泥亞の帝ハ傳國の寶器十二種あり。赤きを以て

入ル馬泥亞の帝傳國の寶器の說

井キス。インセゲニア。又ケレ井ノーヂイン。其中ハ  
 種ハ赤きを其國中拂郎菽泥亞道の子ウレム。ベルク城  
 藏め。四種ハ其物斯法畧道の「アトケン」城ハ藏む。その  
 第一ハ其國中興の聖主カレル。ゴロト帝の所造。乃  
 寶冠なり。金銀を以て赤きを製し。高さ一丈餘。上ハ  
 十字の形をたす。す。赤き明珠美玉を以て赤きを飾  
 り。内ハ紅たる天鷲絨を以て赤きを包む。第二ハカレ  
 ル。ゴロト帝の環。第三ハ上世より傳ふるや。その寶  
 劍なり。明珠を以て赤きを飾り。銀を以て鞘とする。第四  
 ゴウド。レイキス。スセフテル。寶器の名。笏ハ似たり。王者の把るとするの物。第五ハ

「ゴウドレイキス。アツフル」寶器の名よりして形球に似たり 上は黄金の十字あり。第六ハ寶衣あり。明珠を以て飾とす。第七ハ昔より所傳の帝の外套と。甲冑あり。第八ハ寶襪子なり。以上ハ「子ウレムベルグ」城あり。第九ハ美王を以て造りたる寶箱なり。され上古の聖人より所傳の物を納る。第十ハ「カレルゴロト」帝の寶劍。第十一ハ「徹戒」を記す乃寶帶。第十二ハ古の聖人所傳の經典よりして「イシメ」金字を以て記すもの。以上ハ「アーケン」城に貯ふなり。

西洋諸國の名義

西洋諸國の名。その其開基の始祖の名。あるはハ々の始興の地名を以て。總國の號となすものなり。意太里亞國ハ上古の世ハ西齊里亞國王イタリウスといふ者。其地を開きて。始めて耕農の業を其土人は教へしよりして。名ク。羅馬國ハ々の開基の始祖ロムリウスの名よりして。名ク。入ル馬泥亜の古名を「アレマニア」といひ。其の土人は今「つうら」稱して「テウツセ・ランド」といふ。其も其初王アレマニ一名テウトウといふ者の名よりして。其他和蘭の古名と「ハタアヒア」といひ。第那瑪加の別名と「太泥亜」といふの類。皆其始祖の名よりして稱す。

梅。晋の時。河南王業延其祖の名を  
用いて。國号を吐谷渾と名くる。是類也。  
都児格。スウ井ツセル。ランド等ハ。其始興の地。又ハ  
國都の名を以て總國の號となす。あり。され漢郡唐州  
後。國號となり。我日本の總名を。或大和とす。  
うてき者なり。

依蘭地の説

「アイスランド」ハ氷地とす。義あり。其島北方大洋中  
中。あり。氣候極め。寒く。五穀を産せ。草  
木少。土人獸皮を以て衣となす。魚骨を以て家を  
造る。其地夏月ハ絶え。雷なり。冬月ハ雷甚多。

「又」一異事あり。又此地たえ。鼠なり。海船志  
む。鼠を携へて此地に往て。是を試む。ふあ。あ。あ。  
存活するものあり。今此國す。第那瑪加  
の王に属し。思可齊亞の北海「オルガナセ」諸島  
の「グムス」あり。其地。毒物毒蟲。又鼠あり。海船より至る鼠も。此島に來て。忽ち死  
す。

印度の人蛇を啖ふ説

印度の人ハ好んで。蝮蛇を食ふ。他邦の人の鰻魚を  
食ふ。如。其地。一種の大蛇を産。名け

てホイクユアーキユ」といふ。其長さ二丈二三尺より〜  
 四五丈より〜。太さカチもすく〜。稱ふ好んで花多き大  
 樹の上キナキに旋廻し野羊熊鹿の類を生吞り。國人方を設  
 け〜是を捕メダリり。す〜以て食料とし。彼地は居るところの  
 欧羅巴人オウロップも好事たし。者ハ〜彼は效オラしてさきを食  
 す。者あり〜いふ。

按よ。此大蛇又アメリカ洲に産して。テイウボツ  
 と云人のアメリカ紀行よ曰。ハラライバハリバといふ所にて  
 予此蛇を捕り〜を見たり。長三丈餘。太さハ大  
 桶の〜。淡黒色なり。ちよハ其地の里人等其

邊の野よ。おして。此蛇の野羊を吞を見て。アカモ  
 袖筒十三を丁セイ齊サイよ発し。其蛇の頭を碎カキきて。是を  
 得たり。其野羊蛇の腹を裂サキて出イせり。此蛇ハ他  
 の蛇よりも毒なり。故に里人ハいふ。及ナらば  
 ホルトガルホルランド阿蘭陀の人も其肉を食タりたり。

「エツセドンの説」

ま〜韃靼部中タルタリア「シケイチ」の邊は一國あり。エツセトン  
 といふ。其國都もま〜「エツセドン」といふ。其俗父母至親死  
 すれば。則相聚りて其屍を食ひ盡し。〜其頭を雷ライめて。  
 其上タカに金カネを貼テ〜。是を貯タクへて以て神と稱し。毎歳一



たじ是を奈もといふ。

小人國の説

和蘭語は小人を謂て「テウエルゲン」といふ。プリニウス  
の書は曰小人國ハ東方印度の深山の中はありと云ふ  
スタフボ人の書ハ、亞弗利加洲の邊境ハ地はありて、  
其説はいふく小人國其人形軀甚短小にして長僅ハ  
一「エルレン」エルレンハ此方の曲ハ尺二尺二寸四分餘過ぎハ八歳をもちて老  
とかり其婦人一産をもちて五子を生むその孕むれ  
間ハ僅ハ三月はすぎぬ鶴鳥時として其人を吞食  
ふ故ハ小人相聚りて恒ハ鶴と戦争し子を生むとき

ハ洞穴の中ハ隠き居て以て鶴を避くといふ又アリストラ  
レス名の説ハ小人國ハまぐろ泥祿河アフリカの近傍ハ  
ありといふけぐりハ其詳あるもハ知るべしといふ  
又思可齊亞國の属「ウエステルセ」諸島の中ハありて一島  
ありて稱して小人島といふ此地ハ於て地を掘りて其深  
底まで小人の遺骨全く存するものを掘得る者多し  
蓋此島昔時ハ小人ありて居りてあるを知らざりし  
故より今の如く小人島と名くといふ  
今小人國と稱するもの凡三地あり其ハ「サモエデン」  
あり「莫斯哥未亞北邊海」傍の地ありて其北ハツアイ

カツト」といへる海峡を以てイハセンアラ新增白臘の地と對し其人  
 形軀甚短小にして乾魚および蜜を以て糧となす。今  
 ハ莫斯哥未亞より是を治め其人は教を施し其二は  
イハセンアラ新增白臘なり。其地北海の中よりあり。其人は形軀  
 短小にして所居の室屋は是より稱ふ身は海獸の皮  
 および鳥羽を披く衣となり。日月を神となり。是は  
 祈禳は其三ハスタラート。ダアヒスカなり。是臥兒狼徳  
 の西海の濱よりて。アメリカ洲のヤメス。エイランド  
 といへる大島と對する地なり。其人は身は形軀短小  
 して皮を以て衣となり。あまを見り容易は其男女は

辨識するをうへ。身體の色素はあまを白くし。魚脂を塗るが故に其色恒は甚赤黒なり。

犬馬諸獸年を経るといへども小なる者あり。

初生の時の如くならしむるの説

クエツデマンが奇方秘函に曰。ヨードン上卷ヨードンの如徳亜人の子孫の馬保アブラハム。ラサラスといへる人。礼勿泥  
 亜國の界におひく。其地のレキツ。ゲレエルド官名とんの子の厄不逢を救ひしをあり。是より謝す  
 る。一疋の甚小なる馬を贈り。且その奇術を教ふ。其  
 は馬犬猫等および其他の諸獸皆あへて長大ならしむ

して小なるもの初生の時の如くならしむるの法なり此  
時彼処より見るとふたつ馬のみならずそのレキツ  
ゲレエルデの婦の畜ふやちろの一の極めく矮小なる  
犬あり是より此法を以て是の如くならしむるもの  
ありといふ其法犬馬諸獸生きたる數日を経く眼始め  
て開く此時は於て焼酎すゝむるなり小麦の粉并  
よ紅珊瑚のよく擣きつて細末にしてふるもの四支杖以て  
是より餌をとり則ち此獸壽ハよく其天年を保つとい  
はれり形の小なるものハ其初生の時は異なりびと其法  
ハ容易なりて事ハ太奇なりて以て玩物具ふべしといへ

カンギユツト國傳統の説

南印度カンギユツト國ハ安日河の流は近くて此地  
地稍大なる國人其主を稱してサモシリといふ是土地  
の神といふ義なるを此國主の世ニ傳統の例あるは其  
姉妹の子を立て位を嗣がしめて其王の至親子弟ハ  
あへてその統を嗣くことを得ばといふ事ハ一大異事  
なり

アフリカ 亞弗利加洲ノ異類の人物有る説

アフリカ 亞弗利加洲ハ地勢三角をなす其大なるを歐羅巴  
倍ハ其邊海の諸國ハ地みよたむる豊饒ありといへど

も其内地ハ甚道ニ及シテ氣候酷熱<sup>コウ</sup>シテ水泉絶<sup>コウ</sup>少  
 あり曠原荒沙ヤもすれば數百里ニ亘<sup>ワタ</sup>り猛獸驚鳥  
 毒蟲等極めて多く他邦の人跡至り<sup>コウ</sup>た<sup>コウ</sup>の地ハ  
 一<sup>コウ</sup>地氣<sup>コウ</sup>の如く極め<sup>コウ</sup>る故<sup>コウ</sup>其人物風  
 俗甚殊異<sup>コウ</sup>シテ絶えて人類小非<sup>コウ</sup>ざるもの有り或  
 初て子を生め<sup>コウ</sup>必<sup>コウ</sup>ち<sup>コウ</sup>を食ふ<sup>コウ</sup>其<sup>コウ</sup>を以<sup>コウ</sup>て多<sup>コウ</sup>子を生  
 む<sup>コウ</sup>吉利<sup>コウ</sup>なりとす<sup>コウ</sup>ものあり或衆數萬を聚め<sup>コウ</sup>  
 恒<sup>コウ</sup>に遷移<sup>コウ</sup>シ居<sup>コウ</sup>を定め<sup>コウ</sup>ず至<sup>コウ</sup>るの地毎<sup>コウ</sup>小<sup>コウ</sup>其人民鳥  
 獸蟲類小至<sup>コウ</sup>る<sup>コウ</sup>悉<sup>コウ</sup>啖<sup>コウ</sup>ハ盡<sup>コウ</sup>シテ其地の生命<sup>コウ</sup>をた<sup>コウ</sup>  
 してのち<sup>コウ</sup>他方<sup>コウ</sup>に徙<sup>コウ</sup>る者<sup>コウ</sup>有り或其人聲音<sup>コウ</sup>擧<sup>コウ</sup>動<sup>コウ</sup>す

づ<sup>コウ</sup>犬<sup>コウ</sup>は同じ<sup>コウ</sup>き者<sup>コウ</sup>あり或<sup>コウ</sup>は此胸上<sup>コウ</sup>に眼<sup>コウ</sup>ある者<sup>コウ</sup>あり  
 り<sup>コウ</sup>といふ<sup>コウ</sup>あ<sup>コウ</sup>ら<sup>コウ</sup>の事<sup>コウ</sup>ハ二<sup>コウ</sup>三<sup>コウ</sup>百年<sup>コウ</sup>來<sup>コウ</sup>西洋<sup>コウ</sup>波<sup>コウ</sup>爾<sup>コウ</sup>杜<sup>コウ</sup>尾<sup>コウ</sup>爾<sup>コウ</sup>  
 國<sup>コウ</sup>の人<sup>コウ</sup>其内地<sup>コウ</sup>は邊<sup>コウ</sup>に通商<sup>コウ</sup>シテ傳聞<sup>コウ</sup>する<sup>コウ</sup>こと<sup>コウ</sup>なり  
 又<sup>コウ</sup>其海邊<sup>コウ</sup>絶海<sup>コウ</sup>の地<sup>コウ</sup>一<sup>コウ</sup>國<sup>コウ</sup>あり<sup>コウ</sup>エジ<sup>コウ</sup>パ<sup>コウ</sup>ンス<sup>コウ</sup>と名<sup>コウ</sup>く其人<sup>コウ</sup>  
 一<sup>コウ</sup>國<sup>コウ</sup>あり<sup>コウ</sup>アル<sup>コウ</sup>ビ<sup>コウ</sup>ノ<sup>コウ</sup>ス<sup>コウ</sup>とい<sup>コウ</sup>ふ其國<sup>コウ</sup>の四面<sup>コウ</sup>ハ皆<sup>コウ</sup>黒<sup>コウ</sup>人の地<sup>コウ</sup>な  
 り<sup>コウ</sup>とい<sup>コウ</sup>ふ<sup>コウ</sup>特<sup>コウ</sup>此國<sup>コウ</sup>人<sup>コウ</sup>ハ其色<sup>コウ</sup>みな甚<sup>コウ</sup>灰<sup>コウ</sup>白<sup>コウ</sup>シテ<sup>コウ</sup>恰<sup>コウ</sup>死<sup>コウ</sup>  
 人の色<sup>コウ</sup>の如<sup>コウ</sup>く絶<sup>コウ</sup>えて生<sup>コウ</sup>人の色<sup>コウ</sup>は<sup>コウ</sup>何<sup>コウ</sup>ら<sup>コウ</sup>ハ故<sup>コウ</sup>に近<sup>コウ</sup>傍<sup>コウ</sup>諸<sup>コウ</sup>國<sup>コウ</sup>  
 の人<sup>コウ</sup>と<sup>コウ</sup>な<sup>コウ</sup>あ<sup>コウ</sup>きを稱<sup>コウ</sup>シ<sup>コウ</sup>鬼<sup>コウ</sup>魅<sup>コウ</sup>と<sup>コウ</sup>敢<sup>コウ</sup>相<sup>コウ</sup>通<sup>コウ</sup>す<sup>コウ</sup>こと<sup>コウ</sup>なり  
 とい<sup>コウ</sup>ふ

莫卧兒モゴルの暹羅シヤムの尊號シヤムの説

大莫卧兒國本名「モゴリスタン」といふ其始祖タメルラン  
撒馬兒罕國より業を興して天竺諸國を破滅し今印  
度第一の王者なり「モゴル」ハ即其國主の尊號なりて  
「アジア」洲中よ於て金銀寶玉明珠諸珍寶よ富める  
なり最第一なりて兵威強盛ある至尊大君といへる義  
なりとす「暹羅」の國主その名號を其國の方言よ  
て稱するところ甚長し是亦尊號なり是を義譯  
すとバ天より保護するところの神聖の尊體なりて  
暹羅の大國を治め「ユデア」上都よ居て兵威無雙なり

て一百の王族を服後一金冠の寶位よ昇て黄金美玉  
の宮殿よ座し百珍萬寶を擁するの義ありといふ按  
よ唐土漢の時の匈奴の表よ天地所立日月所照匈奴大  
單于と稱し隋の時の突厥の表よ自天生大突厥天下  
聖賢天子と稱するの類なりて且寶物を以て尊號とい  
ふことまゝ一奇事なり

暹羅國シヤムの説

暹羅國其地安日河の東よあり南ハ北極の出地十度  
起りて北ハ十八度よ至る其周廻九五百餘里日本の一支那  
の西南諸蠻の内よ於て其地最大なり隣傍の真臘チホチヤ

マラカ  
 滿刺加マラカなる是は臣服し國內分て十一道とて其國都  
 をユテアユテアとす又オデア是はその國王所居し其宮  
 殿の制度甚美麗都内の人家凡四十餘萬王之親衛の精  
 兵恒は五萬人を備ふ凡此國近世兵威甚盛しして事ある  
 て兵を召すとてハ暫時の間よく大軍を出り王出ると  
 きハ屋を象に駕して幔幕を設く大臣諸將象に駕し  
 て是は後より者多し兵器ハ銃砲弓矢刀鎗種々全備ハ  
 水戦ハ王の大船ハ美麗ある幔をもつて是を飾り  
 諸の戦艦是を圍繞隨後一夥く砲を設けて外面に  
 備ふ恒は兵を用ひ其隣傍の阿瓦亞刺敢アハア琵琶ベガヤ

ニゴマニゴマ等諸國を征して多くハ勝利あり諸國皆是を  
 怖る國中すべく佛法を崇信すその寺觀佛像教法  
 等すべく多くハ亞刺敢國アハアと相同し其人色多くハ黃黑  
 衣服の制も他の印度に類す人家屋室の制多くハ  
 大竹を用ひ椰子樹の葉を以て屋を覆ふ國人皆妻妾何  
 り其妻たる者ハ皆その門戸相對の家より迎ふる者よ  
 して貞静を主とし妻たる者ハ皆賣鬻ベイよるもの賤人カハリ  
 て拘束コウソクする者なり妻の生むるもの子ハ其家を嗣カハリ  
 女子ハ相對の家は嫁り妾の生むるもの子も亦て奴婢  
 となし富人ハ或ハ些少の家私を分ち田宅を何とあるも

何れ大抵その風俗和怡魯鈍なりといへども其内智慧  
 何れものまろく文學諸藝地理航海商賈等の業を  
 能すといふ寛永中播州の人宗心と云ふの再此國小  
 渡海其宗心が話を書し渡天物語といふ書一卷  
 宗心ハ世より天竺徳兵衛といふものなり此書宗心みづから記せ  
 るよハあらば室永四年ハ或人宗心が談話するところを記すものなり  
 此時宗心年ハ十九歳といふ其書中ハ記すところハ風俗物産の類ハさ  
 へるべし其たのまろく地理古跡等を記すところハ極めて疑  
 ぶべくして信ずるは足らば其宗心書中ハ云其地ハ遼磨出生の  
 某の佛寺ハ須達長者の遺址なり其地ハ摩竭陀國の地なり  
 ヒスウといふ城あり此處昔空海と文殊と智慧論せし所なりといふ  
 説などハ何の證據あるところや凡昔よりして日本の諸僧渡天と  
 してハ皆偽なりといふ渡唐して學問をなすもの日本は歸りてのち

我ハ渡天よりなるをいして人を欺た信ぜしめたるなりいはんや  
 空海ハ唐土よりハ名譽をたらしける人なるも渡天の事ハ空海自  
 作の諸書并はたしるる實録ハなきとありさしめて考へ知る處なり然し其宗心が携へ  
 来りし貝多葉ハ文字を記せしもの浪華の蒹葭堂  
 および東都の本田氏各一葉を藏り並に暹羅國の文  
 字なりといふ細針の如き物を以て葉上ハ刻畫し  
 たる者なり世より此貝多葉ハ色別物とあらば椰子  
 の葉より其辨蘭畹摘芳中ハ詳なり

工鄂國の説

工鄂ハ亞弗利加洲西海濱の大國より古より歐羅  
 巴に通せず西洋中興第一千四百八十四年  
 の成化二十年小波爾杜瓦爾國王ヨハン子ス第二世の王の  
 甲辰にあつた

時はいつて其國人ヤークツフ。カニスとソウ者始め  
 て此地より其國東ハ亞毘心域國より西ハ大洋  
 にもうし。南ハ馬拿莫太巴もび喝叭布刺。接ハ  
 為匿亞の諸部も界して中ハロアング安卧辣工鄂ゴ  
 イバツタ斑我ツンタ崩罷へンバ等の諸國を分つ。  
 其地すく川流多く土地肥沃りて夥く香楸橘柚  
 の類を産れ又多く椰子を出し是を以て搾りて酒を  
 釀れす其レリユンテとソウの河水の邊よりしてシン  
 ト。サルハドルの地も且るまでの間ハ則獨鹿樹堅木の名及種  
 ニ佳菓をむすぶの樹満列れ和蘭の人多くハ此地より

〜香桂を得るも此地所産の象ハ他國の産ハ比  
 すきハ最大なり。一牙の重さ二百ポンド一ポンドハ九十六タ又エウ  
 チーンジ一とソウ鳥阿で其皮甚貴。王族の外ハ服と  
 あすも何とせず其人多くハ黒色なるも奴皮ニヒ亞ア  
 び為匿亞等の人ハ比すきハ尤黒くして且醜。其性  
 和怡りて外邦人遠くソウ者あきも皆よく是を  
 礼待り身軀柔弱り〜カ少。歐羅巴の人一を以  
 て其十も當るも足る俗錢貨を用ふるを知らぬ。小  
 小ハ金銀のつらと鍊チらざる塊クワイをもつて物ハ交易す。酋  
 長貴人ハ頭小方中を戴た孔雀或駝鳥の羽を以て飾



となれ。其上體ハ裸身ハ。鎖カの如きものをハ。胸背をつつむ。兵器ハ唯弓矢短劍のハ。小銃を用ゐる。あともあり。鐘ハ樹皮および水牛皮のハ。其國王を號ス。馬泥マニといふものあり。馬泥マニエ鄂マニ。ハムママニ。マンバンダマニ等の號あり。波尔杜瓦爾國ポルトガル人あり。至りてより。地を開き衆を植ク。これ諸地ハ。抛り。ロアンダロアンダ。シント。パウロ等の地。小城郭を築き。酋帥シウスを署シヨ。又その安卧アンゴラ辣國王を擒ト。よして。千六百六十七年ハ。ちきを里西波亞リスボアの都ポルトガルの都に送り。其地の銀鑛シウワを開く。僧官を遣シ。て。政教を施ス。此諸國の人今大半其教ハ。帰服すハ。

アントロポハージイの説

上古の世ハ。ギリキス國の中ハ。一種の人肉を食ふの國あり。是を「アントロポハージイ」と稱ス。今アントロポハージイハ。と稱するの地ハ。亞弗利加洲の中ハ。ハ。曷カハ。布刺ブルス。贊西拔尔ザンシバール等の海邊の地。及び「マロコ」國等の内ハ。ま。ち。あり。亞墨利加洲アマリカの地ハ。伯西兒ボシールおよび「デルラ。マゲツ。ランカ」の部内ハ。ま。ち。あり。皆人肉を食するの徒なり。近世より。伊斯把你亞國イスパニア等の人多く。あ。ち。らの地ハ。よ。して。教化を教ス。悪俗や。う。く。改メ。し。て。其内地絶遠の処ありて。

尚いまた其化流行するよりつらげといふ。

入ル馬泥亜國の鬼城鬼塔の說

入ル馬泥亜國子デルハルツの地は高山あり。名エドリ  
ンビルグ」といへる城を去るより一里なり。此山上は長  
た垣あり。あつちの城を建たるも似たり。皆大石を以  
つめて砌成して造築をたもて奇巧なり。此所ハ山道  
きまめて險阻艱難して絶えなく人工を以てまへにの所  
より知らず。傳へいふ古の時小鬼神の造建するところなり。  
故よ名りて「ドイフルス。ミユル」といふ。ドイフルスハ鬼魔ふ  
又同國中窩失突利亞の内なる。大等比といへる大河

の曲流するところの。高を岩石の上頂よ奇巧なる高塔  
あり。上層は蓋なり。ちよむり「ウエルツビユルク」地名乃  
僧官ブリユクといへる人の徳を感じて鬼神ちよを造  
せしむ。故よ名りて「ドイフルス。トールン」といふ。

勿榻祭亜國の都城の說

勿榻祭亜ハ意太里亜國の中よて東北邊の一國なり。  
世及せざる自立の主あり。是を治むちよ皆國中其  
世家の中より一の最功德ある者を推して主となん  
るのあり。其都城も又勿榻祭亜一名「ヘニセ」と名く。去  
る「ラギユサ」といへる潮なる湖中よりなり。此湖中よ

七十二のちたなをぐいなる島ありよよりく是  
は據く木を椿となく。城を水中に建つ。其周廻凡  
八里城中の街衢皆島上は在るがゆゑは其幅多く狭く  
五百餘処は美麗なる橋を通じて以て往来は便に城  
中すべし水たゆる因に國人船を造ると甚巧なり  
其最大なる橋を「イルポンテ。アルテ」と名く。悉く「マルメル  
の石」を以て造建し。橋上の両邊は美麗なる人家  
を建列し。其橋甚高くして大小の風帆恒に橋下を過  
ぐ。此城中は美麗なる宮殿一百五十餘処。七十の大寺  
觀。三十九の男子の説教処。二十八の婦人の説教処。十八

の大神祠。十七の大なる養病院。一百十五の高臺。五十三  
の大小互市場。五十八の飛泉湧水。百六十四処は「マルメル  
石」を以て造する古人の巨像。二十三処は金銅の類を以  
て造する巨像ありあり。

鐵門關の説

亞細亞洲日阿爾日亞國は名譽の城地あり「テルベント」  
と名く。北高海を離るる。凡三百餘歩。其城一の山上に  
在る。要害きくめて堅固に地勢狭長し。道路  
險阻あり。百見西亞等の諸國より。北方諸國は往来  
する。諸方咽喉の要路なり。初八百見西亞國の王あり

有<sup>タモ</sup>ち<sup>リ</sup>と<sup>リ</sup>と。千七百二十二年日本の享保七年。唐土清の康熙六十一年。壬寅。  
 莫斯哥未亞國の伯多球第一世の帝。兵を遣<sup>ハ</sup>て  
 守を置<sup>キ</sup>て是を治む。此地を  
 都兒格國の人ハ呼ん<sup>ド</sup>テ「テミルカ」<sup>ト</sup>り。是鐵門と<sup>リ</sup>  
 義<sup>ヲ</sup>し<sup>テ</sup>。其要害堅固なること。世はさ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>あ<sup>リ</sup>  
 り<sup>キ</sup>名<sup>ク</sup>る者なり<sup>ト</sup>。按<sup>ル</sup>明世は刻<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>リ</sup>  
 萬國の圖。北高海の邊は鐵門關あり。ま<sup>づ</sup>元の太  
 祖西域諸國を破滅<sup>シ</sup>て。西の方鐵門關に至<sup>リ</sup>て還  
 る<sup>ル</sup>。諸書は見え<sup>テ</sup>。思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>此地ならん<sup>ト</sup>。尚考<sup>ム</sup>べ  
 し<sup>マ</sup>。亞刺比亞國の人ハ此地を稱<sup>ス</sup>「ハツプ。アル

。アビユアブ<sup>ト</sup>。是ハ諸門關中の關と<sup>リ</sup>る義<sup>ヲ</sup>し<sup>テ</sup>。  
 ま<sup>づ</sup>其堅固を賛するの義なり<sup>ト</sup>。

「ゲロー子」の説

韃靼部中の是<sup>シテ</sup>的<sup>チヤ</sup>亞國の。歐羅巴<sup>ニ</sup>近<sup>キ</sup>所<sup>ニ</sup>一國あり。  
 名<sup>ヲ</sup>「ゲロー子」<sup>ト</sup>り。其人<sup>ハ</sup>みな身體<sup>ハ</sup>塗<sup>ル</sup>種  
 二の彩色<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>す。其形<sup>ハ</sup>負<sup>キ</sup>ま<sup>て</sup>めて奇怪<sup>ト</sup>して。怖<sup>ル</sup>  
 べ<sup>シ</sup>。馬乳<sup>ハ</sup>血<sup>ヲ</sup>をま<sup>じ</sup>へ<sup>テ</sup>食<sup>フ</sup>。是を最上の美  
 味<sup>ト</sup>し。人皆武<sup>ヲ</sup>を好<sup>ム</sup>。小事<sup>ハ</sup>をば<sup>ら</sup>ち<sup>と</sup>う<sup>る</sup>。争<sup>ハ</sup>戦<sup>ハ</sup>ん。  
 大仇<sup>ヲ</sup>を獲<sup>テ</sup>む。其皮<sup>ヲ</sup>を剥<sup>キ</sup>ぬ<sup>ル</sup>。已<sup>ハ</sup>身<sup>ハ</sup>纏<sup>ム</sup>  
 て衣<sup>ト</sup>とな<sup>リ</sup>て。以<sup>テ</sup>其功<sup>ヲ</sup>を表<sup>ス</sup>る<sup>ト</sup>。

ガツリュス河水の説

小亞細亞アシアミナルフレイジアア此地は河水あり。ガツリュスアと名づく。其源ハケレニスアと云ふ大山より降りて流れてセシゲルアと云ふ大河に合はる。此ガツリュスアの水其味極めて甘美なり。是を飲めば人を酔もさめく。身體を快暢クワイチヤウし。腦ノウを清潔ケツセツし。はるくさきを以て衰弱の症に用ゐる。其功ありと云ふ。

莫可沙國の説

北亞墨利加洲ノルドアメリカの新渚厄利亞ニューハアニケリア國の邊は一種の夷狄あり。號して莫可沙モッコサと云ふ。其人皆野獸の皮を以て衣とな

す。其形状甚怖るべし。性質きまめく強暴野鄙コウボウヤビなり。皆盜賊を以て業とし。故に他邦の人皆その寇掠コウリヤクを怖る。其廉暴無智なるを察し。恒に計を設けく。其破逐ナクに然る。其部中皆盜を以て業とし。又法あり。其骨肉長者の物を盗むとを禁じ。若是を犯すものはとば。則是を捕へ。生きたらば土中に埋むと云ふ。

多鼠島の説

亞弗利加洲アフリカ聖老楞佐島セントラウレンスの邊は一島あり。マウリツマウリツと云ふ。此地島木を出ず。故に喜望峯ホウテントウと

鎮する和蘭の人其所領の地の野人を遣わして其木を  
斫り取りしむ此島氣候融和して絶えて毒物なり  
然るに満島皆鼠にして其多きと計ふるは勝座を  
らびとふ

ゲ井ム子エテンの説

黒地兀皮亞の中一種の國あり黒地兀皮亞ハ亞弗利加洲の黒人諸國を云ゲ井  
ム子エテンと名く其人皆裸體にして衣を著ることを知ら  
ず常弓矢を挾み猛獸を射し其肉を食ふ水澤の間  
に洞穴を鑿ちて是に居くその水を飲み是に浴す  
且穴中より居て獸を射るは便然るに其地

虎豹猛獸多きを以て睡眠の時におもひ咬み食  
ちることを畏る故に夜に至ると皆大樹の上より臥して  
其害を避くといふ

不老不死の王の事説

拂郎察國ハ歐羅巴洲中の最有名の大王国なり  
地もはる甚大なり皆一王の有る属す國中分ちて  
十二道となり皆守令を置く其太祖フランコスといふ  
者ガツリア國に代りて國を建てのち其王サリス  
聖徳ありて悉國法を定め國人其徳に服し其を  
より其王子孫相嗣し専天に代りて民を救ふを

以て務となり。國勢日は盛りて。近傍諸國多く去りて  
歸化し。今に至るまで。凡一千四百年。國法礼法  
てたえ。禍礼たり。國富物饒。人々其業を  
樂む。故に世に此國王を賛稱。長生不老不死の  
君といふとあり。

近年勃那把尔帝の大札あり。此書古の以前の説より。

風鳥の説

俗より風鳥ハ南懐仁が坤輿外記に無對鳥と作る。和  
蘭語よりハ「ハラテイス」ホーゴルといふ西書に所載の  
説。磐水先生の蘭畹摘芳中すでに譯文ありといふ。

今又ボイスの書に所載の説を得て左に記す。

ボイスが所撰の學藝全書に曰。ハラテイス。ホーゴル和

語「ホーゴル」ハ鳥なり。ヒフ子ルス及びウライツの書にハラテイスハ  
此鳥昔ハトルコの属「ハラテイス」の地より産れと思ひてうくのてくま  
名くして「ハラテイス」の書にハラテイスハ太虚なり。此鳥太虚  
の中を飛翔して地より下りてあきよりて名くして「ハラテイス」の蘭畹  
摘芳に一名「マニコ」チアタ。又名「アヒュス」ハラチシアカと

いふ者ハ一種の奇鳥にして其羽毛華彩繁爛サシる者  
なり。此鳥其羽毛翹翼を具ふる。他鳥とは甚別  
なり。以てんとなき。バその胸よりして甚長き羽を生じ  
て尾よりも長くして且廣きが故なり。此鳥大抵す尾に  
其尾テ毼の所よりして二條の長糸の如くある毛を生

して其色黒く羽とハ異りて且全身の羽よりハばな  
 とも長し眼ハ其頭の諸部ハ比すまバ甚小く喙ハ細く  
 瘦てあるかと鶴鴝セキレイの喙ハ似たり窮理の諸學家及  
 び諸の此鳥を産するの地方ハ旅行せし人の説ハ此鳥ハ驚  
 此鳥ハ數種ありといひりライといふ人の説ハ此鳥ハ驚  
 鳥の一種ありて其小なる者なりといひり此鳥の  
 世ハ所傳の誤説數條あり或は此鳥ハ氣を服  
 す教のまゝありて別ハ飲食をすることなく又其足なく  
 空中ハ飛翔してあへて地ハ下るとも故ハその或  
 年老い又ハ病よりておのづから死して地ハ落つるも

のや拾ひ得るものなりと又あるハ曰此鳥ハ曲アテカガ甚  
 尖利なる爪ツメあり故ハ鳩等の諸小鳥を追て是を捕へ攫  
 こ裂きて是を食ふ其状猶他の鷲鳥ハ異なり然し  
 といふ事よりハ皆虚説なり信ずべからず凡そ此鳥ハ高  
 樹のうへより飛翔するなり其輕捷なることあり  
 飛燕ヒヤシ同ト故ハ印度の人ハ此鳥を名々呼びてテルナ  
 アテテルナの燕といふこと其の「テルナアテ」の地ハ多く此鳥  
 を産する故なり又ヘルヒジウスといふ人の説ハ此鳥  
 鳥ハ赤色印度地方の最南諸地ハ出づるといふ  
 島の一キニリュステルナアテといふ人の説ハ此鳥を定めて大  
小馬路古五



小の二種とす。其大なる者ハ「アルウ」の諸島に出現するもの  
よりして彩色最美麗。尾毚より〜の長毛有り。又  
其小なるものハ「巴布亞禮新為匿亞等」の諸地に産す  
るものよりして大なる者。比すきバ美麗ならん。且尾  
毚の長毛なく。羽毛の色白くして。且黄を帯びたり。小  
凡の大小二種の鳥とも。其中は鳥王あり。それ形他  
の鳥よりハ小なり。其飛ぶと最高きをもち〜是を  
辨別し。其羽毛最光彩有り。それ尾の小なる〜よりよ  
り〜又二の長た羽を生じ。他の鳥ハ〜此鳥王は後  
ひ〜飛ぶ集るの時〜亦是を以て〜識別す。

その上又馬尾に似たる毛有り。末の所より一束となりて  
何つりて旋廻〜最末より〜ハ毛彩有る羽のま  
〜なるなり。

此鳥モリニツク歐羅巴洲地方は好事家甚きと貴重は馬路古  
地方モリニツクよおいてハ此鳥を呼て「マニエコヂアタ」といふアルド  
ロハンチユスといふ人の説は〜是神鳥といふ義あり  
と。然るも其神鳥と名けたるゆゑもいふ〜詳あらん。  
凡此鳥その大なる者ハ身の大きハ大抵鳩の〜  
て。翅ハ赤色なり。ヘルヒジウスといふ人の説は曰。此鳥は  
産する彼炎熱ある地方。常に陰雨多きの候より〜

九箇月の間ハ此鳥の羽毛脱落する多ク然ル歐  
 羅巴の八月の候より其鳥王とシヤもの後ハ  
 至リク羽毛再生ト然ル其鳥王とシヤもの後ハ  
 集ルル猶我歐羅巴の「スプレエウエエ」とシヤ鳥ハ  
 似たり此鳥恒ニ止宿スルところハ揺動スベラザル高  
 大なる樹上ナリ日夕小シシバ諸鳥相率シ一処ハ  
 あつても其鳥王の側を避け次第を逐クあまは宿ル  
 それ食トスルところハ一種の甚高ク枝多  
 乾大樹ニ生スル赤色なる小菓實ナリ人其の恒ニ止宿  
 するところの樹を認め其枝上ニ小窩巢クハサウと云ふ人  
 多ク

多くの小穴を外面ニ穿チテシラウ其中心ニ居テ  
 其鳥の樹上ニあつても止宿スルを待テ其鳥王  
 キ蘆管アシタケより造ル小箭サヤを射テ是を射殺シ  
 其鳥王を射落すとバ諸鳥其鳥王を見てあへて動き飛  
 び人ヲ射ラシムルニ任セテ悉地上ニ落ツ其鳥ハ  
 此鳥の腹を割レ一箇の銃器を燒キ其鳥を腹中ニ刺  
 ト入テ其臓腑および肉等を除去去リこれを烟窓の  
 上ニ懸ケ乾ラシメのち高賈の徒ニ鬻グ是を號シ  
 テ「ビュラング・ハーリュウ」とシ然ル波爾杜尼見國の人  
 ハ此鳥を名ヤク日鳥トシヤナリ

巴布亞私島の土人ハ此鳥の黒色なるものを捕へ獲る。其足および翅を截り去りて、あきとひろげず。其羽を束ねあはせ、修飾して、其所用の中の頂よあきを戴くものあり。此種の鳥ハ其羽美なる黒色あり。且紫色透明。其間ハ金色あり。甚光彩あるもの雜り。其尾翮ハゆるく青緑赤等諸色をまじへて、甚光澤あり。

凡此鳥の羽毛の色種ニ甚多。故に諸家の圖画するところ、其形色殊別あり。一ならず、今詳よあきを伺つめ考ふる。其頭の色美麗あり。種ニなり。あるハ頭の色諸種相雜するもあり。然して其大なる者ハその

色最美。そして透明光澤あり。其頭すべて赤きものも中、稀なりとす。其他ハ青色緑色黒色黄色金色柑子色等種ニあり。大抵その頭及領の上面ハ黄あり。その咽くびハ緑色。其背および翅ハ赤を帯びて、赭栗色あり。其羽長くして、是を掩ふ。此羽の長くきく、その尖末ハ灰白色白色黄色黄赤等を帯び。此諸色の羽聚りて一束となり。色ハ又諸種混合す。故に美觀とするなり。

此鳥其雌雄を分別するの法ハ他なり。其喙と尾翹より生ず。其の長毛と赤色あり。あきを以て識るなり。

「カナアリヤ」鳥の説

ヒブ子ルスが萬國傳信紀事。曰。カナアリーホーゴル「カナアリー」アフリカ「アフリカ」西海中ありて。其鳥大小十二あり。カナアリヤ「アリの」の總名なり。一名「ゲリユキフ」。エイラニデ「エイラニ」と云ふ。漢は福島「福島の」と云ふ。皆「イスパニア」國の王に属す。一名「セリン」。テ。カナアリー「カナアリーの」と云ふ。此鳥その始めハ「カナアリヤ」島より産出。故にその名。其形「ヂステルピンキ」に甚相似。種「種」の小鳥なり。其れ羽毛美し。色種ニあり。轉聲美なり。巢を高樹の上「上」に作る。ヂステル「ヂステル」ハ薊「薊」なり。此鳥好んぐ赤薊を食ふ。故に此の如く。名々其腹ハ多くハ黄し。て。灰白色をうぶ。ふ。又此鳥其色白きもの。及び尚其外種ニの色をたぬもの。

何り羽毛綺麗し。轉聲美あり。其聲佳なり。其聲佳なり。其聲佳なり。のどバ。笛等の樂器をよく法を。遂はよく其聲を佳し。今ハ此鳥入「入」ル瑪「瑪」泥「泥」亞國「亞國」和蘭國「和蘭國」および其他歐羅巴洲中の諸國。皆多く是を産出。此鳥の雌ハ。ヂステル。ピンキ「ピンキ」と交りて。雛を生ずる。その第三度めは。雛ハ。その頭ハ「ヂステル。ピンキ」の如し。體ハ「カナアリヤ」鳥の如し。其轉聲ハ。又或麻の實の類を食す。又此鳥餌「餌」をよく。又或麻の實の類を食す。又此鳥

病ありて、頭は腫物生ずること何らハ、雌雞の脂アテラを塗る處  
 一、多し其腫物熟して潰瘍ウケイ生ずるとも、すべし彼脂を塗る  
 く久く塗りて、遂はよく愈むと治す處、又或此鳥の  
 羽毛は貴つことあり、おれ時ハ、此の種を何れハ、毎日二三  
 度づ、酒を以て其羽毛を煮め、和け、日光のあたる  
 所は、おれ、煮、凡此鳥は雄なるも、此ハ、雌は比す、其を  
 身體細長、尾長く、轉聲最美なり。

墨是、可國大鴉の説

北亞墨利加洲墨是、可の地ハ、一種の鴉を産ひ、其れを名  
 きて「アウラ」又「カウリナス」ト云ふ、其大さあつ、其鴉

の如し、土人は是を「トロピロチ」と名く、此鴉色黒く、其喙  
 ハ、すちぶ、鸚鵡アウに似たり、新伊ハイ斯把パ你亞ア國中、おれ、ハ、  
 恒に見ると、すちぶ、多し、其巢を大樹、何れハ、石の  
 間ハ、造る、其雛生む、始めハ、白く、長ずると、後して黒  
 色ハ、變ひ、其飛ぶ、甚高し、其心臟を採り、日ハ、乾  
 られ、其香氣甚強し、其肉ハ、痘瘡ウツチに用ひて、甚效あり  
 と云ふ。

西洋雜記卷三終

010190533897

西  
活  
雜  
言  
卷  
三  
三

西  
活  
雜  
言  
卷  
三  
三

48 13112

